僕と俺のツインマニューバー

フロンティア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と俺のツインマニューバー

【Ｎコード】
Ｎ８９４６Ｕ

【作者名】
フロンティア

【あらすじ】
『僕』は唯一の家族である妹の待つ場所を守るため。
『俺』は俺から家族を…妹を奪った奴らを討つため。
出会うはずのない二人が出会い、ともに戦う。
その戦いが導く先は、業ゆえの破滅か、あるいは望むべく平和か。

作者は初心者ですので期待はしないでください。
展開等々も無理があったり、グタるところもあると思います。
かつもくせよ！作者の文才の無さに！……（泣）

フォールドの光（前書き）

オリ主とオリ機体があります。不快な方はおもどりください。

フォールドの光

ガチャガチャ…
ん？
あ、皆さんはじめまして。僕、マコト・アスカ（１７才）、マクロスシティ防衛軍に所属するテストパイロットです。よろしく。
僕が今何を何をしているかといいますと、自分の専用ヴァルキリー（ＶＦ－２５７Ｓ）という戦闘機のシステム起動とチェックをしているところなんです。

『マコト！さっさと機体を立ち上げて任務行くわよ！急いで！』ブツッ
と、いきなり画面が現れて怒鳴られました
……ええっと、今通信で急かしてきたのは月鷹葵さん。僕と同じくヴァルキリー乗りで、ポジションはセンターです。あ、ちなみに僕は前衛です。赤くて綺麗なショートヘアで顔はかわいいのに、性格があれなのがたまに傷です。それにいわゆるトリガーハッピー的な所があって…

『マコト、俺と月鷹はもう準備できてるぞ。』

「わかってるって、もうできた！」

今話してきたのはゼロ・ザ・リボルヴ。僕の大切な幼馴染み兼親友兼同僚、狙撃とゴースト操りが得意なやつです。３Ｄ空間把握能力が飛び抜けていて、同時に６機のゴーストを巧みに操りながら狙撃で片付けるという鬼コンボを使います。超強いです。訓練校では首席でした（次席が葵、次が僕）。金髪イケメンなのに彼女いない歴＝年齢です。僕のなかのちょっとした七不思議。

まぁそれは置いといて。
今僕達は三人でチームを組んである任務に向かうところなんです。
それは、今僕達の起動した機体に関係あることなんです。
この機体…ＶＦ－２５７シリーズは、第２５巨大移民船団マクロスフロンティアからの技術提供を受けて開発された機体（実はＶＦ－２７の技術も混じってるんですけどね）で、なにが言いたいかというと僕達三人はその性能テストをしにいくとこなんです。

僕の機体（Ｓ型）は高機動パワータイプで、他の機体との一番の違いは両腕に装備されたアサルトナイフを引き抜いてから使用するＨＰＰＢＳ（高出力ピンポイントバリアソード）による格闘戦を得意とすることです。カラーはトリコロール。昔見たアニメのロボみたいだ…アニメじゃない♪ホントのこ～とさ～♪とかいったところで某ハイメガ砲が撃てたりするわけじゃないんだけど。
葵の機体（Ｆ型）はあんまり特長はなくって、汎用性重視の射撃型です。主武装はガンポッド二挺とマイクロミサイル。カラーは赤。今思ったけどヴァルキリーってよくあんな大量のミサイルもてるよね？

で、最後。ゼロの機体（ＲＧ型）は狙撃・電子戦の両方に対応したカスタムがされていて、デカイアンテナと大型望遠カメラアイを搭載しています。武装も特徴的で、巨大な狙撃・砲撃兼用ライフルをガンポッドの代わりに持っています。
カラーはライトグレーですね。まぁこのほかにも機能はいっぱいあるんですが、今は割愛します。

まぁそんな説明をしてる間にテスト宙域に来て機動テストを開始しようとしたわけなんですが…
「な、なによこれー！？」葵が叫んでます…というか僕も叫びたいです。

いま、僕達三人はせまりくる『黒紫』から逃げています。
「くっ…フォールド断層…なぜこんなところで！？」
はい、突然フォールド断層が現れました。まる。いやなんで！？意味わからん。

「マコト！はやく離脱しなさい！巻き込まれたらただじゃすまないことぐらいわかってるでしょ！？」

「もうやってるって！今フルパワーでスラスターを吹かｓ「ボフン！」……ゑ？」

い、今なにか変な音したよね！？しかもなんか葵達が遠くなって…って！

「ア゛ーーッ！スラスターイカれたーーー！？なんでこんなときにー！？」

「「マコト！」」ゼロとアイが叫んだ時にはもう僕はフォールド波の奔流に巻き込まれて意識がなくなってました。

「ミキ……ごめん……」
僕のが最後に呟いたのは、最愛の、そして唯一の家族である妹への謝罪だったと思います。

こうして僕はどこへいくのかわからない片道切符を強制的に握らされたわけです。

フォールドの光（後書き）

次からが本番。

動く墓標

スラスター各部…グリーン
動力伝達系…グリーン
超小型フォールドエンジン…正常に稼働
酸素残量９２％
各部異常なし、システムオールグリーン、武装も全て使用可能っと。
あ、どうも。フォールド断層に巻き込まれたマコトです。今機体のチェックをしていたところです。幸いにして異常は見あたらなく、スラスターの不調も完全になおりました。
で、まぁ僕の今の状況なんですが…
よくわかんないです。あ、別に宇宙の彼方をさ迷ってるわけじゃないんですよ？宇宙にいますが、一応地球は見えてます。地球は青かった…じゃなくて。
なにがよくわかんないのかというと、僕が今踏みしめている…というか、機体を乗っけている『モノ』なんです。簡易計測によると全長約８０００ｍ。見た感じ廃棄都市っぽいのですが…こんなのあったっけ？所々焼けた跡があったり、違和感ありありなのですが…
で、今現在２つほど問題があるんです。１つは、この廃棄都市（？）。さっきから微妙にゴゴゴと振動していて、ヴァルキリーに簡易軌道計算させた所どうも地球にむかって動いてるらしいです。あれ、これ超まずくね？というのが僕の見解なのですが…いまだに防衛軍の姿が見えません。対応遅くね？
もうひとつの問題なのですｇ『見つけたぞ！！死ねぇえ！』げっ！見つかった！？
「こなくそ！」
ガウォーク形態でたたずんでいたヴァルキリーの足のスラスターを全開にしてマシンガンをよこに滑るように回避。そう、これが二つ

目の問題。
今僕はマシンガンや刀で武装した黒いロボットの集団に襲われているんです！フォールド断層に巻き込まれたと思ったら今度は何！？

「やめてください！なんで撃ってくるんですか！？」

『知れたこと！我等の業を見られたからには、連合であれザフトであれ、生かして帰すわけにはいかぬ！ましてや奇妙な新型など！』

さっきからこの人達（今対峙しているのは１人ですが）は時々意味不明な語句を発します。連合？ザフト？なにそれ食えんの？

「業って一体……？」

そこまで言った時、僕の思考に電撃が走った。まさか…

「まさか、この都市が地球にむかっているのってあなた方のせいなんですか！？」

『そうだ！このユニウスセブンは我が娘の、そしてコーディネーターの墓標！落として焼かねばならんのだ！』

なんてバカなことを！

「娘の墓標だかコーディネーターのだかなんだか知らないけど、こんなの落としたら地球にいる人達みんな死んじゃいますよ！？わかってるんですか！」

全長８ｋｍの隕石…海に落ちれば巨大津波で沿岸都市が、陸に落ちれば核の冬に匹敵するものが…妹のミキがいるマクロスシティだっ

て！

『ふん！ナチュラルのゴミどもなどいくら死のうと！』

え…？か、仮にこの人の言う『ナチュラル』ってのが地球に住んでる人のことを指すなら…こ、この人は地球にいる人達がたくさん死ぬことをわかってやってると？人の命をゴミだと…？

冗談にほどがある…

「ふっざけんなよ！あんたは人の命をなんだとおもってんだ！」

僕は唯一の家族であるミキを失うわけにはいかないんだ！

「食らえ！」

ガンポッドから放たれた無数の青いビーム弾が黒いロボットにせまる。だけど、そのロボットは地面をけって巧みによける。この人…結構上手い！

相手のマシンガンも火を噴く。僕もさっきみたいに回避するけど、今度は回避先を読まれて撃たれた。その弾道は直撃コース。だけどそれだけじゃ！

『もらったぞ！』

弾丸がせまる。だけど、僕は落ち着いてバロイド形態に変形して手のひらを相手に向けてＰＰＢ（ピンポイントバリア）を展開。

腕の先に円のように展開されたそれはマシンガンの弾をたやすく跳ね返した。

『なにっ！』

相手から驚愕の声が聞こえる。そして、それは高機動戦闘では致命的な隙となり。

「はあああああ！」

僕は両腕からそれぞれ一本ずつアサルトナイフを引き抜いて全長８ｍにもなるＰＰＢＳ（ピンポイントバリアサーベル）を二本展開。一気に黒いロボットに接近してその両肩に突き刺してから、あたかも豆腐を切るかのように斬り落とした。これで相手は武装を無くし、機動も制限された。…僕の…勝ちだ。

『ぐあっ…くっ、貴様、なぜわからん！』

「何が！」

『それほど複雑な機体を扱えるならば貴様もコーディネーターであろう！今やプラントは軟弱なクライン派どもに毒されてしまったが…パトリック・ザラがとった道こそが唯一正しき道だとなぜわからん！』

「僕はそんなんじゃありません。コーディネーターだとかパトリック・ザラだとかプラントだとか一体なんなんですか！僕はただのマクロスシティを守る防衛軍のしがないパイロットです！」

そう言って僕は。

「あなたみたいに命を弄ぶひとは、こうなるんです！」

ガン！と、腕のなくなった黒いロボットを明後日の方向に蹴り飛ばしました

…大気圏突入の熱で焼け死ぬがいいさ。

『ぐっ！だが、私を倒した所でもはやユニウスセブンはとまらんのだ！』

ははは！と笑いながら飛んでいった。

…最期の笑いがムカつくけど、ほんとにどうする？ＭＤＥや反応弾があるならまだしも、僕の機体は格闘機能を中心に強化した前衛型。つまりマイクロミサイルならともかく、反応弾みたいな戦略兵器は積んでない。

ならばいっそのことヴァルキリーで押す？いやいやいくらなんでも馬鹿すぎる。

たかが隕石１つ、ヴァルキリーで押し出して見せる！なんて某新タイプみたいなかっこいい台詞、僕は死んでも言えません。それにサイ〇フレームもないので人の心の光なんて見せられません。

そんなバカなことを考えていた時でした。

「！熱源反応？しかも多い！」

防衛軍が来てくれたんだ！やっほい！

そう思っていた時期が僕にもありました。

「あれ、熱紋反応がヴァルキリーと一致しない…黒いロボットとも違うからまたアンノウン！？」

あわててカメラを最大望遠にすると…

「え゛」

緑のボディ。
肩のスパイクシールド。
手の突撃銃。
あの頭のピンクのモノアイ。

はい、ザクですねわかります。

いや、わけがわからない。ザクはあくまで架空の存在。そう、アニメのなかでしか存在しないはず。だけどいま僕の目の前にはたくさんのザクがいて、なにやらデカイ機械をはこんでいる。対隕石用の破砕器具かな？一応敵の敵は味方？というかこのシリアス場面でなぜにザク？落ち着け僕、ＫＯＯＬに、じゃなくて、ＣＯＯＬになるんだ。

って！さっきの黒いロボットがどこからかわらわらと大量にわいてきてザクに襲いかかってる…ザクの方は全然対応できてないじゃないか！破砕作業器具をやらせるわけにはいかない！

ファイターモードで一気に接近し、三機に襲われて孤立してる隊長機っぽい青いザク（角がついてるのに赤く塗ってない…だと…）の後ろにまわっていた黒いロボットにバトロイドに変形してからライ〇ーキックのような蹴りでぶっ飛ばした。

直後、通信回線が開く。

『ザフト軍ジュール隊隊長、イザーク・ジュールだ。援護に感謝する。』

「マクロスシティ防衛軍所属、マコト・アスカ少尉であります。わ

けあって今はこんなところにいますが、破砕作業の援護をしてもよろしいでしょうか？」

互いに早口。

相手の…確か、イザーク隊長だったかな？はちょっと訝しげな顔をするも、

『よろしく頼む。破砕作業はこちらが行うのでテロリストの相手を。』

と言いながら承諾してくれた。ついでに識別コードも送ってくれた。

（というか話ながら残りの敵機二機を余裕でボコるとかどんだけ強いの？というかザクなのにビームだと！？）

ちなみにさっきの黒いロボットは『ジン』という名前らしい。

……でもやっぱり『ザフト』って軍には覚えがないんだよなぁ。ザクがいるし…まさか平行世界（フォールド技術のおかげで単なるおとぎ話とは言えなくなってるらしい）に来ちゃったとか？

…まさか、ねぇ？

散りゆく光の中で（前書き）

タイトルは気にしてはいけない

散りゆく光の中で

「あ、熱い…」

みなさんこんにちは、マコトです。

只今絶賛大気圏突入中です。

今僕の視界は真っ赤に染められていて、でも別に葵に画面をペンキで塗られたれたとか、ゼロにトマト投げつけられたとかではなく、そもそも宇宙じゃトマトは凍って粉々になっちゃうし、あったらとっくに燃え尽きてるし、まぁかといってカメラがおかしくなったとか僕が大怪我で流血しているとかそんな危ない状態じゃなく、いや危なくないわけじゃなくっていまもそれはもうとても危なくて、何が言いたいかというとはやく熱おさまってーーー！？

まぁそうは言いつつも、実は今もガンポッドとミサイルを総動員して破片（５００ｍくらい）を撃ちまくってるところです。他にもデカイ破片はたくさんあるけど、アレだけは危険すぎる！

そもそもなんであんな破片が生まれてしまったのかというと、敵の増援（？）らしきものが三機きて、それらがザク達を圧倒している間にジン達に隕石破砕器具…つまりはメテオブレイカーを何機も破壊されてしまったのです。

でも実は今破砕作業をしているのは僕だけじゃありません。ザク側（つまりはザフト）の増援として現れた４００ｍの巨体を誇る戦艦…ミネルバ。

その艦が艦首にあるトンでもない火力の巨大砲を発射しながら僕のすぐ近くを降下中です。

そして、破片がだいぶ小さくなった時でした。
突然、グン！と引力が強くなり、機体の安定が保てなくなりました。
「くっ…大気圏降下フェーズ3突入…これ以上は…」
これ以上バトロイドモードでいると燃え尽きる可能性が…
かといって回りにはまだ破片が…
ピピ！
突然僕の画面に通信が入ります…あの艦（ミネルバ）から？
『こちらザフト軍艦ミネルb…ってシン！？そんなところでなにやってるの！？』
女の人（と書いてオバサンと読む）が怒った声で一方的にどなってきます…
シンって…誰？

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

タリアSIDE

「ミネルバはタンホイザーを撃ちながら地上へ降下します。議長とアスハ代表はボルテールへの移動をお願いします。」
私は残った破片を撃破するためにタンホイザーを撃ちながら大気圏

に突入することを決めた。今ここでやらないと、また戦争になってしまう…そうなったら、ギルがいままでなんのために努力をしてきたのかわからなくなる。

「グラディス艦長、私は残らせてもらえないか？」

アスハ代表…

「アスランがまだ戻っていないんだ…」

…これはテコでも動かないわね。

「わかりました。では議長…」

「私も残らせてもらうよ、タリア。」

「な、なぜです？本艦がこれからすることの危険性はわかっておいででしょう！」

ここにギルを残すわけにはいかない。下手をすれば命が…

「なに、ミネルバならば大丈夫さ。『あの機体』がいまだに頑張っているのに私だけ逃げ出すというのは、いささか納得がいかないしね。それに、あの機体も厳しくなってきているようだ。こちらで回収してあげようではないか。」

見たところ母艦も近くにはいないらしいしね。議長命令ということで。とギルは続ける。

彼のいう『あの機体』。なぜかユニウスセブンにいて、こちら（ザ

フト）に協力してくれたアンノウン。複雑な変形機能を備えた機体らしいけれど、連合の新型かしら。

「……わかりました。ですが優先順位はユニウスセブンの撃破を第一に。タンホイザー照準。目標ユニウスセブン巨大デブリ！…てぇ！！」

赤く巨大な陽電子の波がユニウスセブンの残骸を消し飛ばす。

そして、何発ものタンホイザーがユニウスセブンを撃ち抜いたとき。

「ミネルバ、降下フェーズ3に突入！タンホイザーを格納します…インパルスとザク、帰還していません！」

「なんですって？あのアンノウンは？」

「いまだに破砕作業を続けています！」

三機とも、なんて無茶を…危険がわからないの？

「タリア、あのアンノウンに通信できるかね？」

「大気圏突入の影響で厳しいかと。」

「やってみてくれ。」

「わかりました。メイリン！」

「了解！」

すると、意外なことに通信はすんなりとつながった。

「ザフト軍艦ミネルb」

そこで私は言葉を失いました。確かに『アンノウン』と繋がっているモニターには、ミネルバの艦載機である『インパルス』に乗っているはずのシン・アスカの顔が映っていたから。

「ってシン！なにをやっているの！？」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

マコトSIDE

「ええと、私はマクロスシティ防衛軍所属のマコト・アスカといいます。…シンという名前ではないのですが…」

女の人がかなーり訝しげな顔をしますが、僕の名前は断じてシンではありません。

『…先程は失礼。こちらのパイロットにあなたによく似た人物がいるもので。私はミネルバの艦長、タリア・グラディスです。』

「グラディス艦長、用件はなんでしょうか。こちらはギリギリまで破砕を続ける予定なのですが。」

『…あなたの機体は余裕をもって大気圏突入が可能なのですね？』

なんでかグラディス艦長が意味深にきいてくる。

「はい。ただの突入ならば余裕があるのですが、バトロイドモードでの破砕作業はもう限界ですね。」

ファイターモードならばもう少しだけいけますがと付け加える。

『こちらの機体二機が行方不明なんです。うち一機には重要人物が搭乗しています。近くに確認できれば救助をお願いできないかしら？』

別に断る理由はない。…ガンポッドでの破砕作業なんて、たかが知れてるし…

「わかりました。二機の特徴を教えてください。」

『一機は通常のザクで、もう一機はあなたの機体のようなトリコロールカラーの機体、インパルスよ。』

「了解しました。」

そして僕はその二機を探してブーストを吹かす。

散り行く光のなか、『僕』と『俺』の運命の出会いはすぐそこに迫っていた。

ミネルバの話

「見つけた！」

僕は思わず叫んだ。
グラディス艦長から頼まれた二機。白いインパルスと緑のザク。二機はインパルスがザクを持ち上げるようにして飛んでいた。

「大丈夫ですか！？」

即座に通信を入れる。慌て気味なのは、ザクがいろんなところからスパークを吹いてるからでしょう。↑足がとれてる

そして、僕は現れた画面の向こうにいる人物に唖然としました。

ヘルメットの形も、スーツの色も違う。だけれども、それを着ていたのはまぎれもなく…

「僕！？」『俺！？』

相手も僕もビックリ。だけど、事態は僕達に驚いてる暇を与えません。

「グラディス艦長からの要請であなた方を回収に参りました。状況を教えてください。」

我ながら凄まじい切り替えの早さ。でもこうしなきゃ死んじゃうからね。

『ええと、ザ、ザクの方は大気圏突入の影響でシステムダウンをおこしてます。インパルスの方で支えていますが、もうスラスターが限界です！』

「状況了解。ザクはこちらでミネルバまで運びます。インパルスはミネルバまで飛べますか？」

『大丈夫です。』

そのやりとりのあと、僕はヴァルキリーをガウォークモードにしてザクを上から抱え込んだ。

すると、ザクのほうから通信が入りました。

『アレックス・ディノだ。救援に感謝す…ってシン？』

また間違えられた…

「自分はマコト・アスカであります。」

『す、すまない。忘れてくれ。で、こちらはどうすればいい？』

「まず僕がザクの胴体を上から抱えるので、そのあと手足のパーツをパージしてください。」

『わかった。』

そのあと、多少のトラブル（インパルスからザクを受けとる時に手が滑ってザクを落っことしたり）はあったものの、なんとか僕達はミネルバまでたどり着きました。

さて、みなさん、僕にとってはここからが問題な訳ですよ。

僕の中でほぼ確信していること…それは、ここが僕のいた『世界』ではなく、『異世界』、つまりは似て非なる世界だということ。最初は半信半疑でした。ですが、さっき通信でもうひとりの僕（ただのそっくりさんという可能性もありますが、それにしてはあまりにも似すぎです）と対面して確信しました。それにフォールドの発達で存在が指摘されていましたしね。

つまり、素直に「自分異世界からきました～」とかいうと痛い目で見られるわけで…なんと言おうか迷っています。最悪機体技術をネタにして交渉しないとかも…

とまぁ説明はこのぐらいにして、ミネルバへの着艦許可が出たのでザクをおろして僕も機体をガウォーク（いつでもスムーズに脱出できるように）モードにして甲板（デッキ）に降り立ち、着水後格納庫へと移動しました。インパルスはすでに格納されていたみたいです。

ヴァルキリーの回りには銃で武装した人達が半円陣を敷いていて、その奥にはミネルバのグラディス艦長が見えますね。…隣の男性はだれかな…？

さすがにいきなり蜂の巣は怖いのでＥＸギアは着たままヴァルキリーをおります。腕部には一応拳銃を内蔵しておいて…っと。

「マクロスシティ防衛軍所属、マコト・アスカであります。着艦許可、ならびに受け入れ感謝します。」

よし、我ながら完璧な初動。ビシッと敬礼も決めて印象は悪くないはず。

「ザク、ならびにインパルスの回収、感謝します。マコト・アスカさん、ミネルバへようこそ。」

意外に好意的にグラディス艦長が応じてくれました。

「あなたとは少し話がしたいので、こちらへどうぞ。」

そういわれ、僕はグラディス艦長と長髪の男性と一緒に艦内を移動。その途中、また僕そっくりな人…シンさんに会ったけど、今回は会話はありませんでした。

ミネルバ応接室にて。

「さて、あなたの所属をもう一度きいてもよろしいかしら。」

「はい。自分の所属はマクロスシティ防衛軍であります。」

僕が正直に答えると、グラディス艦長は難しい顔をします。

「…それは地球連合の部隊かしら？」

「いえ…自分は連合という組織は知りませんが、新統合軍の一組織がマクロスシティ防衛軍であることは確かです。」

「…それは真面目にこたえているの？」

「大真面目です。」

グラディス艦長はさらに眉間にシワをよせる。小皺が増えますよ？
↑増やしてる原因は僕

「真面目にこたえて。あなたは何者？場合によってはそれ相応の対応をとらせてもらうわ。」

ここは一か八か。

「グラディス艦長。質問に質問を返すようで申し訳ないのですが、『マクロス』、『ヴァルキリー』、『フォールド』、これらの単語に聞き覚えはありませんか？」

「ないわね。それがあなたの正体に関係が？」

「ええ…あの、非常に言いにくいのですが…」

これは…精神にくる…

「僕は『異世界』から来たみたいなんです。」

なかば予想どうり、僕を見る視線が生暖かい…

「ふざけるのも「まぁ待ちたまえタリア。」！議長…」

ここで、さっきから黙っていた長髪の男の人が初めて口を開いた。
てかこの艦の責任者であるグラディス艦長よりも地位が上の人？議長っていうあたり、かなりの要人なんだろうけど…

「失礼ですが、あなたは？」

「まだ名乗っていなかったね。私はプラント最高評議会議長、ギルバート・デュランダルだ。」

このやりとりの間、グラディス艦長は僕を…なんというかこう、奇異というか、哀れみというか、そんな目で見てきます…

なんだろう…僕のなかで何かが磨り減っていく…

「僕にはプラントというのが何かわからないのですが…」

ふむ…とデュランダル議長は黙り込んでしまいました。

「まぁいいでしょう。今は時間がありませんから話しはまた今度。これから本艦はオーブに向かいます。あなたがどうするかは自分で決めてちょうだい。」

グラディス艦長の言葉でこの場はお開きになった。

僕は士官用の個室をあてがわれたのでそこで端末をつかっていろいろ調べてみようと思います。

ミネルバの話（後書き）

異世界の同一人物という考え方はスパロボＺをやるとわかりやすいかもしれません

オーブの日

「じゃあお前はオーブで降りるんだな？」

そう話しかけてきたのはどこか不機嫌なシンさん。

「そうなるね。ザフトじゃない僕が、いつまでもミネルバにいるっていうのは…ね。」

「でも寂しくなるなぁ。マコトがいないとどっちがどっちゲームができなくなっちゃうし。」

ルナマリさんもちょっと残念そうな顔です。あ、ちなみにどっちがどっちゲームというのは僕とシンさんが並んでどちらが誰かを当てるゲーム。まったく同じ容姿だからこそできる技。

「これからは連合とプラント間で色々あるだろうが、達者でな。」

低く落ち着いた声はレイさん。

デュランダル議長とグラディス艦長との話し合いが終わった後、僕はミネルバのクルーの人達と仲良くなった。特に仲良くなったのは今の三人。最初にあったときはびっくりしたよ。ルナマリアさんは葵に、レイさんはゼロにそれぞれそっくりなんだもん。初対面で、「葵、ゼロ！お前らもきてたんだな！」なんて言って勘違いで顔が真っ赤になったのは仕様です。

「そういえば、オーブってシンさんが前に住んでたとこですよね？」

「ああ…」

あからさまに不機嫌な顔をするシンさん。
やっぱり、戦争でなにかあったのかな…

「……なにかあったんですか？」

「二年前の戦争でな。家族みんな死んだんだ。アスハが見棄てたんだ…！」
そう言うシンさんの手は固く握られていて、震えていました。

「すみません、いやなことをきいてしまって…」

「いや、マコトが悪いんじゃない。アスハとフリーダムが悪いんだ。フリーダムがやったんだよ…」

「そういえば、マコトの家族は？」

ルナマリアさんが僕にきいてくる。

「妹がひとり、歌手をやってますね。」

「マコトの妹、なんて名前なんだ？」

「ミキ・アスカ。まだ駆け出しの歌手ですけど、歌は滅法うまいんですよ？」

ほら、これが写真です、と僕が端末に表示した写真をシンさん達に

見せると、レイさんとルナマリアさんはかわいいとかきれいだとかいってくれました。しかしシンさんは…

「マ……ユ……？」

……やっぱり、なくなった妹のマユ・アスカさんにミキを重ねていたようです。後で遺品のケータイにあった写真みたら、ホントにそっくりだから。

「では達者でな。なにか困ったことがあったら遠慮なくプラントにくるといい。」

「はい。議長もお元気で。」

「ああ。君こそ元気でな。（そう、君には無事でいてもらわねばな…）」

なんとなく違和感の残るデュランダル議長と最後の言葉をかわし、僕は（カガリさんという方のはからいのおかげで接収されずにすんだ）ヴァルキリーごとミネルバをオーブで降りました。

もっとも、議長もオーブで降りてからマスドライバーという施設（宇宙に物資を射出する装置）を利用してプラントに戻るんだとか。僕は一旦ヴァルキリーを港の指定されたエリアに預け、シンさんと一緒にオーブを歩くことにしました。

「こんなに平和で活気溢れてるのに、二年前は敗戦国だなんて信じられませんね…」

これは僕の素直な感想。道行く人は誰もが笑ってる…まぁ僅かに憂いを含んだ顔もあるけど。

「アスハの馬鹿が二年前マスドライバーをぶっこわさなきゃ、もっと活気があって賑やかで…いい町だったんだよ。」

「ウズミ・ナラ・アスハの自爆ですね。他国の争いに関与しないという理念を守ってマスドライバーとモルゲンレーテを吹っ飛ばした…」

「そのせいでマユは死んだんだ…理念ばっかで国民切り捨てたんだよ、アスハは！」

いかり血走った目で静かに語るシンさん。ミキが死んだら僕もこうなるのかなと思うと少し怖くもある…

そして…

「ここが…」

「ああ…慰霊碑だ。二年前の…」

やって来たのは海岸の崖の上にある慰霊碑。そこには、先客がいました。

スラッとした長身に、ショートシャギーの髪の毛。こちらを向いた

目はアメジスト色の瞳。

「君達は…」

と語りかける声は憂いを帯びていて。

「花…潮を被っちゃったから枯れちゃうね…」

少しの沈黙。

「…誤魔化せないってことかも。」

「「え？」」

突然口を開いたシンさんに驚く。

「どんなに綺麗に花を咲かせても、人はまた吹き飛ばす。」

「……」

「すみません、変なこと言って。」

そういいのこして、シンさんはそそくさと行ってしまった。

「シンさん…」

「君は、彼の兄弟？」

「いえ…世の中には自分にそっくりな人が三人いるもんなんですよ」

「そ、そう…」

「……彼、家族をオーブで失ったらしいんです。」

「そう、なんだ…」

「言ってました。アスハに切り捨てられて、フリーダムに殺されたって。」

「！！」

僕が慰霊碑と海を見ていなくて、彼を見ていれば、あるいは気がついたのかもしれない。彼の驚いたような、悲しい顔に。

しばらく、僕達は夕日と海を眺めていた。

そこで、僕の端末に突然通信が入る。

相手はシンさんだった。

「もしもし？どうし『大変だマコト！』どうしたんですか！？」

シンさんはものすごくあわててるようだった。

『地球連合が再結成して、プラントに宣戦布告してきたんだ！それに伴ってオーブが大西洋連邦と同盟結んで、ミネルバに仕掛けてきたんだよ！クソアスハめ、今度はころっと理念捨てやがった！マコトも機体かっぱらって逃げろ！』

「オーブがミネルバを！？わかりました、僕はミネルバを援護します。」

『って、いいのか？お前も追われる身になっちまうけど…』

「こんなグズみたいな外交しかできない国にいたくありませんよ！」

きっぱりいい放つ。

ここから港まではそうは離れてない。

通信を切ってさっきの男性に振り返る。

「すみません、いかなければならないので。」

「うん…」

僕はそれだけ言うと走り出した。だから、聞こえなかった。彼が、

「カガリ…」と呟いたのが。

オーブ脱出戦（前書き）

感想ありがとうございます。

オーブ脱出戦

ＥＸギア接続確認
パイロットバイタル正常
フォールドドライヴ正常に起動
システムオールグリーン
ＶＦ－２５７

Ｒ　Ｅ　Ａ　Ｄ　Ｙ

その文字がヘルメットに現れるまで約１秒。

正直、今はその時間すら惜しい。

ミネルバのいる港に戻った時は、すでにそこは戦場だった。

オーブ軍の量産型ＭＳ…ムラサメ。ヴァルキリーとは違った変形機構をもったそれがビームライフルでミネルバを撃っていました。

ミネルバはインパルスをフォースシルエットで出撃させて、ルナさんの赤ザク（ただし三倍にあらず）には砲戦装備を、レイさんの白ザクにはミサイルパックを取り付けてミネルバの直衛にして応戦してますが、ムラサメが５０機近くもいる状況では分がわるそうです。てか今まで持ってるってのがすでにすごい…

幸いにして、僕のＶＦ－２５７Ｓ…思えばまだ名前がないんだよなぁ…は港の外れ、つまり戦闘が及んでいなかった区域にあったので無事乗り込むことができた。

『マコト君、きこえる！？』

通信はグラディス艦長からだった。

「はい！」

『シンからきいたわ。私達に手を貸してくれるのは嬉しい申し出だけど、あなたまでオーブに敵対するわよ？』

「僕、自分たちを命懸けで守ってくれたような人たちに武器を向けるような恩知らずって大嫌いなんですよね。」

『そう…ならここはいいわ。あなたはマスドライバーの議長を！』

「了解！」

通信を切る。

ヴァルキリーのエンジンを最大出力でふかし、建物の屋根を突き破って外にでた。すぐに5機のムラサメが向かってくるけど…

「邪魔だよ！どけよバカ！」

バトロイドになって、ガンポッドから放たれる無数のビームが二機のムラサメを瞬く間に蜂の巣にしてしまう。

その間も、画面には次々と赤い三角が現れていき、１０機ほどロックしたあたりで。

「くらいやがれー！」

マイクロミサイルを盛大に御見舞いして差し上げた。

一気に敵の数が１０近く減る。
港包囲網にぽっかりと空いた穴を通って、僕は議長のいるマスドライバー施設に向かった。

マスドライバーのレールの上にはすでにシャトルが出ている。しかし、本来動いているはずのそれは完全に止まっていて、ムラサメ１０機に包囲されていた。
にもかかわらず、なぜシャトルが無事なのかというと、全身を赤いＰＳ装甲らしきもので覆った機体と、オーブ軍の旧主力機Ｍ１アストレイ（ｂｙミネルバデータベース）の色違いらしき機体が防衛しているからだ。
でもそれももう持ちそうにない。
ってか、全身赤い機体はすでに腕が取れとるー！？
「させるかぁ！」
ファイターモードのまま機首全面にＰＰＢを集中させてムラサメに突貫する！
「ゲェェキガン！フレアー！（あれ、電波が僕の口を勝手に！？）」
んなことはおいといて、ぐちゃぐちゃになったムラサメを突き放して議長のシャトルのそばに降り立つ。

「議長、ご無事ですか！？」

『ああ、マコト君、来てくれたのか。私は今は無事だが、マスドライバーが使えないのでは…』

諦めたかのような弱い口調で話す議長。そうなるのもわかる。シャトルはマスドライバーが動かなければ、ただの鉄屑だから。だけど、諦めるのはまだ早い！

「議長、僕の機体に！」

『なに？』

『おいお前！味方なら手伝え！』

議長との通信に突然割り込んできた金髪女。てかこの人って…

「…アスハ代表、なにやってんですか…」

オーブ国の代表、カガリ・ユラ・アスハ代表その人だった。

つまりは敵方総大将。

『私もはめられた…私がプラント訪問をしている間にセイランが…』

と、そこでアスハ代表の機体にビームが走る。僕はそれをとっさに展開したＰＰＢで機体の前で防ぐ。

「今はこの状況をなんとかします。アスハ代表は敵を防いでいてください。僕は議長を救出します。」

『わかった！あ、それともう一機私たちに味方してくれてるのはジ

ャンク屋のロウってやつだ！間違って撃つなよ！』

「わかりました！」

赤いラインの機体…つまりはロウさんという人はこっちに向かってサムズアップをしていた。うん、いま戦闘中だよ？どんだけ余裕なの？というかその手の輝く日本刀が羨ましい…んなことはひとまず置いといて。

「では議長、こちらに！」

僕はハッチをあけ、ＥＸギアのブースターを使って地上に降りた。

「よろしく頼むよ。」

議長を抱えあげ、一気にコックピットに戻る。

「予備の対衝撃スーツを着用してください！」

「これかね？」

「はい！」

このやりとりの間もアスハ代表とロウさんは大量のムラサメとアストレイを相手にしてる。だけどスーツを着用せずに戦闘機動のヴァルキリーに乗るのは自殺行為に等しいからもう少し頑張って！

３０秒ほどがたち、ようやく議長が着替え終わり、僕はヴァルキリーをミネルバに向かって急速発進させました。

ＳＩＤＥ　ロウ・ギュール

はぁ～、一体オーブはいつからこんな国になっちまったんだろなぁ…

確かに政治に恩知らずってことはあるかもしれねぇ…

だけどよぉ、自分たちの命張って地球守ろうとしてくれたやつらにいきなり戦争吹っ掛けるなんていくらなんでもあんまりじゃねーか。しかもザフトの新造艦ミネルバに乗ってきたデュランダル議長をマスドライバーに誘い込んでから殺そうとするなんて、これがまともな人間のやることかよ…

あ、議長乗せた機体が行ったみたいだな…

それにしても。

「うひょー！あんな変形するＭＳ初めてみたぜ！あ、そうだ！こんどミネルバに押し掛けてみせてもらおう！」

どこまでもメカ一筋な俺であった。

まぁそのあいだにもガーベラストレートの錆びになるムラサメは順調に増えてくんだけども！

「ガーベラストレートぉぉぉ！」

機体解説（前書き）

ネタバレは、たぶん無いです

機体解説

ＶＦ－２５７（マコト機）

近距離戦闘型のマコト機。主にスラスターや機体制御関連がＶＦ－２５よりも向上。より人間に近い動きができる。基本武装はガンポッド（ＶＦ－２５のビーム版）、マイクロミサイル、アサルトナイフなど。特徴として、ピンポイントバリアをアサルトナイフの延長線上に高密度に圧縮して黄緑色のビームサーベルのようにすることができる。ルックスはＶＦ－２５よりもどことなく重装甲。カラーリングはフォースインパルスみたいなトリコロール。頭部はＶＦ－２５アルト機を参照。なんでもＶＦ－２５７シリーズはマクロスシティ防衛軍が開発した最高機密の新型フォールドドライヴを搭載していて…？

バカな作者の超簡単方程式

ガンダムエクシア＋ＶＦ－２５アルト機

＝ＶＦ－２５７マコト機

ＶＦ－２５７ゼロ機

遠距離戦担当。ＶＦ－２５ルカ機とミハエル機を足した感じ。大型のスナイパーライフルは制圧力に優れる砲撃モードと一撃必殺の精密射撃モードがある。さらには小型ゴースト三機を従えていて、それを使って敵を追い込みスナイパーライフルで仕留める戦法は、シンプルながら厄介極まりない。常人より優れた空間認識力とインプラントによる並列処理能力をもつゼロならではの戦法。ただし機動

力は以下略状態。頭部はミハエル機のそれに似ていて、長距離狙撃用カメラがある。カラーは灰色。

方程式
ガンダムデュナメス＋ＶＦ－２５ミハエル機＋ＶＦ－２５ルカ機＋ガンダムヴァーチェ
＝ゼロ機

ＶＦ－２５７葵機

月鷹葵のヴァルキリー。中距離での戦闘に長けている。高い機動力を有し、戦場ではいち早く中距離を制して場の流れをつくる。武装はガンポッドなどの基本武装以外に面制圧能力が圧倒的な突撃用ショットガン『ボクサー』を登載。すさまじい弾幕を相手にお見舞いする。頭部はＶＦ－２７γに似ている。カラーは赤。

方程式
ストライクノワール＋アーバレスト＋アリオスガンダム
＝葵機

登場人物

マコト・アスカ（１７）

本作品の主人公をつとめる少年。最新鋭ヴァルキリー（ＶＦ－２５７）のパイロット。容姿はシン・アスカと瓜二つ。ヴァルキリー乗りとしては珍しく近接格闘を最も得意とする。インプラントは受けていない。最新鋭ヴァルキリーのテスト予定区域で謎のフォールド断層に巻き込まれガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹの世界に飛ばされた。

ミキ・アスカ

マコトの妹。マクロスシティに住んでいて歌手をやっていてる。

月鷹葵（つきたかあおい）

マコトの同僚で同じ最新鋭ヴァルキリーのパイロット。性格はかなり大雑把でややせっかち。容姿はルナマリア・ホークと全く同じ。ややトリガーハッピー。中距離の射撃戦が得意。インプラントは受けていない。

ゼロ・ザ・リボルヴ

マコトの親友。ヴァルキリー訓練校での成績はわざと下げていてずっと最下位クラスだった。だがかなりの知略家。もちろん最新鋭ヴァルキリーのパイロット。空間認識能力が高く、ゴーストと大型狙撃砲を用いた非限定空間戦闘ではまさに無双。いつも冷静にものごとをとらえるが、理想主義的な一面もある。容姿はレイ・ザ・バレルと同じ。インプラントを受けているが、空間認識能力は先天的なものらしい。

番外編、僕と学校と模擬戦争（前書き）

番外編その１
バカテス風に（笑）

番外編、僕と学校と模擬戦争

４月。学生達にとって、それは新しい生活の始まりになります。何故ならば新しい学校、あるいは新しいクラスでの暮らしが始まるから。

かくいう僕もその学生のひとり。僕が向かうのはマクロスシティ防衛軍パイロット養成学校。端的に言えば、ヴァルキリーのパイロットを育てるところです。

そして、他の学校にはない特別なシステムがあります。それは…『クラス間模擬戦争システム』

これは各学年ごとに行われるクラス分け試験（新一年生は入学試験）の結果で６段階に割り振られたクラス間で模擬戦争をするというもの。学校備え付けのシミュレーターを使って行う戦争で、相手のクラス代表機を撃墜すれば勝ち。下位クラスが勝った場合、上位クラスと設備を交換できます。ちなみに試験の成績がよければ良いほど新しい＝強い機体が使用可能になります。また総合点数は機体の耐久や攻撃力に関わってきます。

さて、僕は今校門の前にいるのですが。

「おはようございます、西村先生。」

「おはよう新入生。ほれ、これがクラス分けの結果だ。」

そう言って西村先生は僕に封筒を渡します。

「まったく…」

「？」

ビリビリと封筒を破いて中身を取り出すとき、西村先生がなぜか溜め息をつきました。

「学校創設以来初めてだぞ…」

ようやく封筒から結果の書かれた紙が出てきます。

「実技試験以外全ての科目で名前を書き忘れて０点になったにも関わらず合格したやつなどな！」

マコト・アスカ
Ｆクラス

「ここか…」

古い畳。ひび割れたまど。塗装のはがれたかべ。そしてちゃぶ台。
そう、Ｆクラスは最下位のクラスなんです…当然設備も劣悪。ああ、Ａクラスのシステムデスクが羨ましい…

「想像以上に酷いな…」

そんなことを呟きながら後ろの方の席につきます。

ガラガラ…

ちょうどその時、教室の扉が開いて担任らしき人が入ってきました。

「ええ…皆さんおはようございます…Fクラス担任の福原です…ああ、じゃぁ廊下側の人から順番に自己紹介を…」

バキィィ！

教卓がゴミクズになっただと

「……替えを持ってきますので自己紹介すませといてください…」

冷静すぎです、先生。

まぁ自己紹介はとりあえず何となく進み…

すると、一人の生徒が黒板の前に立ちます。

「みんな、俺がこのクラスの代表になったゼロだ。呼び方は任せる。さて…みんなに質問だ。」

そう言って僕達の方を指差し、

「お前ら、この教室に不満はないか？」

「「「「おおありじゃー！」」」」

な、なんというシンクロ…でも確かにこの教室は嫌ですね…

「そこでだ。俺たちＦクラスは模擬戦争を仕掛けようと思う！」

え〜。

「無理だ上位クラスに勝てるわけがない」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

確かに…Ｆクラスとほかのクラスとの間にはかなり差がある。例えばＦクラスの使える機体が精々ＶＦ－０１ぐらいなのに対し、ＡクラスはＶＦ－２７γみたいな超高性能機まで使える。

つまり、勝ち目がない。

「まぁ待てみんな。このクラスにはＡクラスに勝てる要素がしっかりそろっている。」

自信満々に言うゼロ。一体どこからその自信が？

「まず、月鷹葵だ。」

「え？あたし？」

赤髪が特徴の女の子、月鷹さんはびっくりした様子ですね。

「そうだ。俺は全員分の入試の成績をしっているのだが…」

さらっとすごいこと言いましたよ！？

「え、なんで？」

月鷹さんが全員共通の疑問を口にします。

「ハッキングだ。」

……この人のにはプライバシーという概念は通用しないんですねわかります。

「それでだ。月鷹は総合成績こそ悪いが、操縦センス自体はかなりいい。入試でも教官相手にいい立ち回りしていたしな。」

それに、と言葉を紡ぐゼロ君。クラスのみんなは教官と互角だったという月鷹さんのことでそわそわしている。

「マコト・アスカだっている。」

……ああ、このクラスには同姓同名の人ｇ…でなんで僕のことを指さすんですか？……はいすいません僕です。

「アスカは入試を戦闘シュミレーション『のみ』の点数で突破した。それ以外の点数は名前の書き忘れで０点だ。」

クラスがざわめく。

「そうだ、こいつは今回の入試で唯一、教官との１ｖｓ１模擬戦で教官を撃墜した男だ！」

「「「なにぃ！？」」」

いや…そんなに驚くことでは…

「無論俺も全力を尽す。どうだみんな？勝てるとは思わないか？」

「「「おおー！」」」

みんな口々にこれならかてる！とか、Ａクラス打倒も夢じゃない！とか言ってる。

「ならば全員準備にかかれ！戦争の用意だ！」

「「「おおー！」」」

代表、すごいリーダーシップだ…

「あ、アスカと月鷹は昼飯の時に作戦を伝えるから一緒に来てくれ。」

「うん」

「わかったわ。」

さてと、おもしろいことになりそうだな（笑）。

昼。校舎の屋上。

「で、作戦って？」

葵（さっき名前で呼んでって言われました。）が早速ゼロ（こちらに同じく）に作戦を聞いてます。

「先ずはＥクラスに模擬戦争を仕掛けようと思う。まぁ１つランクが上のクラスに勝てばＦクラスのやつらも自信がつくだろう。」

「「なるほど。」」

「そこで、今回は奇襲戦法でいく。マップはデブリベルトだ。」

「でも誰が奇襲をかけるのよ？」

「勿論マコトだ。」

「え、僕？」

「そうだ。お前と葵には戦争前にもういっかいテストを受けてもらう。どうせ点数がなくてＶＦ－０１ぐらいしか使えないんだろ？」

「う…」

「ギクッ…」

「マコトには恐らくＶＦ－２５を使えるようにするだけの実力があるはずだ。」

「え、マコトそんな頭いいの！？」

葵、そんなに驚かれるとなんか…

「これを見ろ。」

ゼロが取り出したのは…

「マコトの入試の答案用紙だ。」

「ちょっとまてー！！なんで？なんでもってるの！？」

「こいつのホントの総合点数は…」

三日後、戦争当日。

「よしみんな、準備はいいな！？」

「「「おおー！」」」

「マコトが敵代表機に闇討ちをしかける！しっかり陽動してきっちり死んでマコトの道を作ってこい！！」

「「「了解！」」」

みんな士気高いですね…まぁＦクラスのいいとこかな？

「じゃあマコト、開戦から３０分経ったら出撃、反対側にいる敵代

表機を討ってくれ。」

「わかったよ。」

みんなの機体（だいたいがＶＦ－０１、時々ストライクヴァルキリー）がゼロの近衛部隊を残して次々飛び立ちます。

「あたしも行くわね。」

そう言って葵のストライクヴァルキリーも陣地から発進します。

作戦開始から３０分経過。こっちの戦力は大分削られてしまいました…今は葵がなんとか戦線を維持してます。

「さて、マコト、頼むぞ！」

「わかった！」

機体のアクセルをめいっぱい踏み込む。

１０ｋｍ×１０ｋｍの正方形マップの至るところにあるデブリ。その中を縫うようにして敵代表機の反応のある所までとぶ！

『機体』が生み出す莫大な推力はあっという間に僕を敵代表機のところまでブッ飛ばした。

『な、Ｆクラスの奇襲か！？』

近衛部隊の一機が僕に気づく。でも遅い！

「いっけー！」

機体背部にある二連装ビームキャノンが一撃で敵機を撃墜する。

『敵襲だと？』

『代表を守れ！』

近衛部隊機３機が向かってきます。

近衛部隊機１
ストライクヴァルキリー
耐久（総合点数）１０２８

近衛部隊機２
ストライクヴァルキリー
耐久１２８０

近衛部隊機３
ストライクヴァルキリー
耐久１１４０

やはり近衛部隊機だけあってＦクラスより強い…だけど！

「じゃまだ！」

三機をロックしてミサイルを吐き出す。

『な、はやい！？うわぁぁ！』

『落とされた！？こっちにも、ぐぁぁ！』

『ち、ちくしょー！』

三機ともなにもできずに撃墜。

『くっ…Ｆクラスの、それもたかが一機なんてよくもなめた真似を…ってその機体は！？』

Ｅクラス代表機
ＶＦ－１７Ｄ
耐久１５７１

ｖｓ

マコト・アスカ
ＶＦ－２５Ｆ（トルネードパック装備）
耐久５５１４

『ＶＦ－２５！？それもトルネードパック装備型！？なんでＦクラスにＡクラス並、しかも学年首席クラスの装備が！？』

「あんまりＦクラスだからってバカにしない方がいいよ。」

ピピピと代表機をロックオン。

「みんなだって、がんばってるんだから！」

トルネードパックの武装を全弾ぶちかます！

『キャァァァ！』

敵代表機耐久１０２。

最後に残ったＨＰを

「はぁぁぁあ！」

ガキーン、とアサルトナイフを突き刺して削りきる！

ビビー！

『そこまで！勝者、Ｆクラス！』

こうして、僕らの最初の模擬戦争はＦクラスの勝利に終わりました。

ですがゼロは設備を入れ換えないようです。めざすはあくまでＡクラスだからなんだとか。

次の目標はＤクラスだ！

番外編、僕と学校と模擬戦争（後書き）

どうですかね？
好評なら続編も書こうかと思います。

終わらぬ戦い（前書き）

受験のためこれ以降更新遅くなります

終わらぬ戦い

地球連合軍。今現在プラント・ザフト軍と戦争状態にあって、つい最近オーブと同盟を結んだところ。つまりは…僕らの『敵』。

オーブを無事脱出した僕達を待っていたのはそれだった。

「待ち伏せ…！？ブリッジ遮蔽！コンディションレッド発令！各員戦闘用意！」

「コンディションレッド発令！パイロットは機体への搭乗お願いします！」

グラディス艦長の命令によりコンディションレッドが発令、メイリンさん（ルナマリアさんの妹）が復唱する。

それは格納庫にいる僕達パイロットにも届いた。

『この戦いはこれまでにない激戦になるわ。連戦で申し訳ないけれど、各員の奮戦を期待する！』

「連合の奴ら、早いな…おおかた、オーブが情報を流していたんだろう。」

「くそっ、またアスハか…！どこまでも…」

「ほら、シンもレイも早くいく！マコトもでるんでしょ？」

「はい。議長に頼んで僕も当分の間ミネルバ所属としてもらえるこ

とになりました。改めてよろしくお願いしますね。」

こっちからはヴァルキリーの技術提供もしたんですがね、とは自分以外に聞こえないよう呟く。……それにしても、この機体のフォールドドライヴはプロテクトがかかってて情報がひきだせなかった…なにかあるのかな…？と、考えるのは後。

体をＥＸギアに接続。

直ぐに最適化が始まって、画面に表示されるＲＥＡＤＹの文字を確認して、突然爆発音とともにミネルバがゆれた。至近弾くらったのかな…

『各機、衝撃に備えてください！トリスタン、イゾルデ斉射後、ヴァルキリーとインパルスは出撃して敵ＭＳ部隊の排除を、ザク二機はミネルバで艦上迎撃を行ってください。』

そして、トリスタンとイゾルデ斉射のものと思われる大きな揺れと爆発音の後、僕は空に飛び立った。

「シン・アスカ、コアスプレンダー、行きます！」

「マコト・アスカ、ＶＦ－２５７、発進します！」

「ルナマリア・ホーク、ザク、出るわよ！」

「レイ・ザ・バレル、ザク、出る！」

出撃した僕達を待ち受けるのは連合の主力汎用機、ウィンダム。大気圏内飛行用のジェットストライカー装備みたいです。

「シンさん、僕が左舷の敵をやります。シンさんは右舷を！」

『わかった。じゃあいくぞ！』

それを合図に僕とシンさんはそれぞれの方に散ります。

「そこっ！」

ガンポッドの射撃が一機のウィンダムのスラスターに風穴を空けると、そこから大爆発をおこして散っていった。

そうする間にも大量のビームと小型ミサイルが機体を掠めて…って！？

「ちょっ、どんだけいるんですか！？」

まさに『文字どおり』のビームとミサイルの雨あられ。回避できるものは回避、直撃コースはＰＰＢ張って対処。とりあえずなんとかなるけど数が多い！

『なんだあの機体は！？』

『ビームが弾かれる？まさか、ザフトも陽電子リフレクターを実用化したのか！？』

『ビームが通じないなら接近戦をしかける！』

五機のウィンダムが盾とサーベルを構えて突撃してきます。だけど僕に近づくのは間違いです。

「そこは僕の距離だ！」

ＰＰＢサーベルを引き抜いて、ヴァルキリーの圧倒的加速力でうしろをとり

ズパーン！

『『ぐぁぁぁ！』』

ＰＰＢの刃が二機のウィンダムを一閃。

『コーディネイターめ！落ちｒ』

グシャっ！

後ろから迫る敵機をＰＰＢを展開した脚で蹴り抜く。だから言ったでしょ？

「ここは、僕の距離だって！」

グサッと、機体をひねりながら投擲されたアサルトナイフは相手のコックピットを正確に貫く。

『きさまぁぁぁ！』

突撃してきた最後の一機を

ガコン！

ＰＰＢを展開した手で鷲掴みにし

「ばぁぁぁくねつ！ゴ〇ド！フィンガーァァァァ！」

……電波を受信してしまった…

「ヒィィィト！エンド！」

ドーン…

うん、倒せたからいいや…

そういえば、倒した一人がコーディネイターめ！とか言ってたな…。遺伝子操作の有無だけで人を化け物扱いするなんて…僕らの世界から見ればひどく醜くて、悲しいよね…

ＳＩＤＥシン

マコトすげぇ…あんなデタラメな機動ができるなんて…それに技も隙がなくて、接近戦は今の俺じゃ絶対勝てない。あれ位の腕があれば俺にもフリーダムが落とせるのかもな…

ビビビビビ！

ん？敵の新手！？

熱源反応のあった場所にカメラを向けると…

「な、なんだ！？連合の新型？デカイ！」

巨大な緑の蟹のような機体が連合の艦から発進してきた。

ＳＩＤＥタリア

「敵艦より、巨大ＭＡらしき機体の発進を確認！」

メイリンの声がブリッジに響き渡る。

……なるほど、敵もバカじゃないってことね。現状のＭＳとＭＡの力関係を逆手に取った大型機動兵器ってことなら…

「あんなのに取り付かれたら終わりよ。タンホイザーを使うわ！（ただ、ＭＳ隊がＭＡの後ろに退避したあたり、何かありそうね…）各機に通達！タンホイザーの射線上から退避させて！発射後はミネルバの援護を。」

「了解！友軍各機はミネルバの射線上から退避してください。タンホイザーを使います。」

「アーサー、タンホイザー起動開始（シーケンススタート）！」

「了解！タンホイザー起動！ハッチオープン、砲口展開確認！プライマリ兵装バンクコンタクト！出力定格！初弾エネルギー装填！セーフティー解除！」

「照準、敵新型モビルアーマー！タンホイザー、てぇぇぇ！！」
ミネルバの艦首から巨大なビームが発射される。それは射線上の全てを蒸発させながら蟹ＭＡに直撃する。
「やったぁ！」
アーサーが喜ぶ…けど…まだ…！
（なんてでたらめな防御力…陽電子砲を防いでくるなんて…！）
私には見えた。あのＭＡがバリアのようなものを張る瞬間が。

ＳＩＤＥマコト

ミネルバから極太ゲロビが発射されて、巨大ＭＡを貫いた…ように見えたけど、多分防がれた！
『へっ、ざまぁないな。』
『ほんとね～』
「シンさん、ルナマリアさん、まだ終わってません！」
『『え？』』
僕の声に反応して二人の声がはもる…

タンホイザーの膨大な熱量のせいで発生した水蒸気の幕は、風で徐々に取り払われていった。そこで見えてきたのは…

『な、え！？』

『なんで！？』

『…強力なバリアか？厄介だな…』

透明なバリアのようなものを展開しているＭＡと、そのうしろのほぼ無傷の連合艦隊でした。

シンさんとルナマリアさんは驚き、レイさんは冷静に状況分析。

「ミネルバでは無理な以上、あれを撃破するのは僕らの役目、か…」

僕らの戦いは、まだ終わらない。

『ＳＥＥＤ』（前書き）

お待たせしました

『SEED』

タンホイザーは効かない。ビームライフルやガンポッドなんてきくはずもない。ミサイル撃ってもＰＳ装甲乙。

つまり

ただいま絶賛大ピンチですね、はい。

『もぉ～なんなのよこいつは～（泣）』

そんなこと言いながらもオルトロスを敵ＭＳにぶちこむのは忘れないんですねルナさんわかります。問題は針の穴を通すように『ミスってる』ことだけど。どちらかと言うとルナマリアさんは格闘向きですからね…

あの蟹型ＭＡの厄介なのは謎のバリア。射撃武器では突破は恐らく不可能。接近戦をするにしてもやはりバリアに阻まれてしまいます。

バギュゥゥン…

「くっ…」

さらに、いま撃ってきたような大型のビーム砲をいくつも搭載していて、それはまさに針鼠。

『クッソー！！』

シンさん、今突っ込むのは迂闊すぎる！

「『『シン（さん）！？』』」

『ルナマリア、シンの回りの敵機を排除だ！マコトはシンのフォローを！俺はミネルバを守る！』

「了解！」

『わかったわ！』

ファイターモードでシンさんのもとにいそぐ。

シンさんはビームライフルでＭＡを攻撃するけど、強烈なバリアのせいでやはり一発たりとも有効打にならない…あのバリアをなんとかしないと…！！

『いい加減落ちろよ！』

なおもビームを乱射するインパルス。……あれ？たしかインパルスの動力源は……

カチッ

『え？』

『あ』

『やらかしたな…』

「……？あ！」

上からシンさん、ルナマリアさん、レイさん、僕。カチッというの

はビームの空撃ちの音。

つまり…

『しまった、エネルギーが、うわぁぁぁ！？』

バッテリーの限界を迎えたインパルスの足を、ＭＡは前足に展開した巨大な爪で引きちぎった。

ＳＩＤＥ　シン

バッテリー切れでビームを空撃ちした…それに動揺したから足をやられた…

はは、なにやってるんだよ俺は…ダッセー…

こんなんじゃマコトや、フリーダムなんかにはいつまでたっても絶対かなうわけないだろ…

もっと冷静に…感じろ、動きを読め、隙を狙え、機動を止めるな…ッ！

もう…俺は！

「こんなところで…こんなところで俺はぁ！」

その瞬間、俺の瞳はハイライトを失い、頭の中を風が吹き抜けた。

ＳＩＤＥ　マコト

『こんなところで…こんなところで俺はぁ！』

シンさんが崩れた体勢をレッグフライヤーをパージして建て直す。

『メイリン！デュートリオンビームを！それからレッグフライヤー、ソードシルエット！全艦薙ぎ払う！』

さっきまでとは違って、冷静さも感じられる声で的確な指示を伝えるシンさん。

それに応えるような迅速さでミネルバも対応する。

すぐにデュートリオンビームが放たれ、それを受信したインパルスはＶＰＳの鮮やかなトリコロールを取り戻す。同時にレッグフライヤーとソードシルエットと合体。機体が赤色中心に変色する。巨大な対艦刀、エクスカリバーを取りだし、

『ハアアアア！』

勢いをつけてＭＡに振り下ろす。

バチィン！

『くっ…』

しかし、ＭＡのバリアはエクスカリバーの重い一撃すら嘲笑うかのように弾き返し、ビームを撃ってくる。

「（どうすれば…どうすればいいんだ！）」

その時だった。

『こいつを…つかえぇぇぇ！！！』

突然響いた声。見覚えのあるＭＳ…――ああ、たしかジャンク屋のロウさんだ――から自分に投げられた『刀』。

それを受け取って、鞘から一気に引き抜く。

『そいつはガーベラストレートＩＩ！俺のガーベラストレートの二本目だ！』

この武器…すごくよく馴染む。

世界がスローモーションになったかのようだ。

ピンポイントバリア、刀身に集中展開

大上段にかまえ

関節をうまく使い、限界まで―そう、バネのように―力を引き絞り

「はぁぁぁあ！」

爆発させる。

一閃。

ＭＡが縦に『ずれて』いく。

『ば、バカな…ザムザザーが…！？』

ドオーンと緑のＭＡは爆発した。

ふとシンさんの方を見やる。シンさんは狙いを変更して、巨大な対艦刀エクスカリバーで連合の水上艦を攻撃してるみたいだ。はやくいかないと。っとその前に。

「ロウさん、ありがとうございました。」

『いや、きにすんな！それと、その刀やるからよ！』

「え！？でもなんで？」

『なんとなくお前のメカ、笑ってる気がしてな。じゃあな！』

ロウさん…謎です。

ＳＩＤＥ　デュランダル

シンのあの活躍…ふふふ、発現したようだな…ＳＥＥＤが…

やはり『彼女』の言う通り人は遺伝子に縛られる生き物なのかな？
だが私は『彼女』に世界を渡すつもりは毛頭ない。そのためならば
『歌姫』や『スーパーコーディネーター』とでも…
ピピピ！
ん？噂をすれば…か…
『議長。』
「なんだね？」
『連合がプラントに対して核攻撃をかけてきました。』
やはりきたか…
「迎撃は？」
『成功です。しかし市民は黙っていないでしょうね。』
「アレの準備を。」
『承知しています。あとアスラン・ザラが訪ねてきましたが…』
「やはりな。手はず通りに。」
『了解です。ふふ。』
最後に妖艶な笑みを見せて通信を切ってきた。

「まったく…彼女には気をつけていかねばな…」

彼女はグレイス・オコナー。私の秘書だ。

『SEED』（後書き）

受験生なので時間無いです…更新が遅いのはご容赦を。

カーペンタリアの休息（前書き）

ようやくできました

カーペンタリアの休息

ミネルバはオーブを脱出したあと、負った傷を癒すためにカーペンタリア基地に入港しました。

議長は到着早々プラントに戻りました。仕事が溜まってるんだとか。

船員には全員下船許可が出たので僕はシンさんと一緒にマク?ナルドで昼飯です。

「そういえば、ミネルバに新しくＭＳが配備されるらしいですよ。なんでも、遅れて完成した可変空戦用のセカンドステージらしいです。」

「へぇ…でも誰が乗るんだ?ルナ?それともレイ?」

「それが、新しい人が配属されるらしいです。」

「新しい人か…つよけりゃいいんだけど。俺らみたいに新兵なのか?」

「さぁ、そこまでは…あ、噂をすれば。」

そう僕が言って指さす方向では、赤色の戦闘機形態のＭＳが基地にランディングしようとしていました。

「見に行きません、シンさん?」

「賛成。」

僕たちはハンバーガーを飲み込んで格納庫に向かいました。

格納庫にて。

「あ、ルナマリアさん」

ルナマリアさんも赤い機体のパイロットを見に来たみたいです。

「ああ、シンとマコトもきたんだ。でもどんなひとなのかしらね～」

そう言ってるうちに、コックピットハッチが開いて人が降りてきました。パイロットスーツが赤い…つまり赤服か…

二、三言整備士と話をしてこっちに近づいてきました。

「ミネルバに配属されたアスラン・ザラだ。誰か艦長の所まで案内をしてくれ。」

「「「アスラン・ザラ！？」」」

ヘルメットを脱いだその顔は、確かに以前助けたアスラン・ザラさんでした。

って確かこの人オーブの人間なんじゃ…

「なんでアンタが！アンタはオーブの人間じゃないのかよ！」

シンさんが激しい口調で問います。よく見ると回りの人達の目線もかなり敵意がこもってる…

オーブが僕たちにしたことを考えると仕方ないか…

「俺は特務隊ＦＡＩＴＨの人間だ。バッチもちゃんとある。」

そう言ったアスランさんの手には銀色のバッチがありました。

「てかＦＡＩＴＨってなんですか？」

ズテーーーッッ！！

なぜか皆さんこけました。そして哀れみのような視線が妙に痛い…

「……ＦＡＩＴＨはザフトの特務隊…自由行動権をもった人間の部隊のことだ。有り体に言えば偉いってことだ。」

レイさんが説明してくれました。

「なるほど。ではザラさん、マコト・アスカが案内します。こちらへ。」

「あ、ああ。ありがとう。」

カチャリ、と僕はアスランさんに拳銃を突きつける。ここは基地の中でもほとんど人がこない所だから人目は気にしないでいい。

「……これは一体なんの真似だ。」

「それは多分あなたが一番わかっているのでは？」

「…俺はスパイなんかじゃない。れっきとしたザフトの軍人だ。このＦＡＩＴＨバッチもある。なんでそこまで疑うんだ。」

「確かにあなたは正式にザフトに復隊したのかもしれないです…ですがあなたがオーブの現首長のボディーガードだったのも事実です。」

「それがどうしたんだ。それなりの理由がないのなら「この事を報告しますか？それとも僕を殺しますか？前者は構いませんし、後者はあなたには不可能です。」……。」

「僕達はすでにオーブと戦っているんです。前議長の息子たるあなたなら末端はともかく上のほうの信頼を得るのは比較的簡単なはずです。スパイにはもってこいですよね。」

それに、と僕は銃を突きつけたまま続ける

「はっきり言って、オーブという国は最低です。確かに政治に恩知らずという言葉は無いのかもしれません…だけど、あの国は最低限のモラルすら守らないような国です。現に宣戦布告すらしていないのに襲ってきましたし。」

「あれはセイラン家の暴走で「結局、オーブがしたことに変わりは

ないんですよ。」なんで君はそんなに…！」

「許せないんですよ、オーブという国が。騙し討ちみたいなことして、自分で国を焼いて、世界を混乱させて…」

「カガリはそんな…！」

「…確かにアスハ代表の考えは違うのかもしれません「なら！」だけど…『違う』だけじゃ…『変われない』。何も、変わらない。」

「……。」

「…いいです。アスハ代表にはオーブ脱出のときの借りがあります。あなたをミネルバにおつれいたします。…ですが。」

「変なことをすれば後ろから撃つ…か？」

「もちろんです。」

「わかった。好きにすればいい。」

き、きつかった～…緊張で心臓が破裂しそうだった…

ああいうことは艦長がやるものなんだろうけど…でも自分の耳でききたかったからね…アスランさんの本音。

多分アスランさんは信用できる…はず。でももしなにかあったら…僕はミネルバのみんなを失いたくない、だから引き金を引く。ほんと、自己中心的な人間だな…僕は。

てか。

「…迷った…」

アスランさん送り届けたあと基地内で迷ったという悲劇…

カーペンタリアの休息（後書き）

実はＡＯ入試が一週間後なんですよね…汗

その頃天使達は（前書き）

ようやくできました…

その頃天使達は

緑色の閃光の直後、爆音と共に建物が揺れる。

断続的に飛び交う銃弾。黒い戦闘用スーツに身を包んだ者達が常人とは思えないほど洗練された軽い身のこなしで僕達に迫る。

孤児院の子供達はなんとか安全に逃がすことができた…だけど相手がＭＳをもってるなんて…

「キラ…」

隣にいるラクスも心配そうにしてる。この状況で、僕がやるべきことは一つしかない。

「ラクス、鍵を。」

「…行くのですか？」

「うん。僕は大丈夫だから、先にアークエンジェルに。」

ラクスは心配そうに顔を伏せる。そんな顔をしないで欲しいんだけどな…。

「……わかりました。」

そう言って『扉』の鍵を僕に渡すラクス。

そんな悲しい顔をさせないために、今僕はまた戦う。

『見つかったか？』

『いや、建物の地上部分にはいない。』

『ならば捜索範囲を広げて地下をー―』

そこまで言った時、突然襲撃者の乗っていたＭ１アストレイ（・・・・・・・）の右腕とライフルが一筋の緑の光に貫かれて爆散した。

『なにっ！？』

襲撃者たちは一斉にカメラで空を見上げる。

『出てきたか！』

『第二作戦目標「フリーダム」を確認した。これより排除する。』

襲撃者達の視線の先には、自由の名を冠する天使がいた。

ＳＩＤＥ　キラ

なんで…なんでアストレイが僕達を…プラントでも連合でもなくなんでオーブが！？

「やめてください！なんでこんなことを！」

だけど、５機アストレイは言葉ではなくビームで僕の通信に応えた。

「くっ！」

宙返りするようにしてビームをよけて、一機のアストレイの頭部、つまりはメインカメラに向けてライフルを発射。だけど、アストレイはそれがわかっていたかのようにわずかに頭部を反らした。

「カメラをずらしてよけた！？くっ！？」

次々に襲い来るビームの嵐。とてもたった５機のアストレイから放たれるものとは思えないほど正確な射撃。

今までの相手とは全然違う！こいつら、ただのアストレイじゃない！

『キラ！』

突然通信機に聞こえてきた声に僕は耳を疑った。

「カガリ！？なんでこんなところに！？きちゃだめだ！」

かつての僕の愛機。紅いストライク、ストライクルージュがそこにいた。

画面に移ったカガリの顔は怪我をしたのか、血が流れている。

『セイランだ…セイラン家が軍の大半を動かしてクーデターを起こしたんだ！』

え…？じゃあカガリは！

『そうだ…私も追われてる！アークエンジェルで逃げるしかない！』

「わかったよカガリ。」

そう言って僕は『ＳＥＥＤ』（本気）を解放する。

思考と感覚が圧倒的にクリアになって、フリーダムの反応速度が飛躍的に上がる。

アストレイがまたライフルを向ける…

一閃、一閃、一閃。

急接近してライフル、カメラ、足を次々にサーベルで破壊。

二機のＭ１が左右斜め後ろから接近してる…

宙返りの要領で二機のサーベルをひらりとかわして、後ろをとると同時にライフルの連射でカメラと武装を破壊。

あと二機

一機は突っ込んでくる、もう一機は…上か！

ライフルは上に、バラエーナ二門は正面に、斉射！

爆音が響きわたって、5機すべてのアストレイが横たわる…

がすぐに自爆してしまった。

『……終わったか…』

「カガリ…」

『セイラン家のやつらは連合と組んでプラントと戦うつもりらしい。あいつらはオーブの理念をなんだと思ってるんだ！』

「今は脱出しよう。この世界で何が起こっているのかを知るためにも…」

そして、大天使（アークエンジェル）は飛び立つ。僕達の未来を乗せて。

「僕達は…今度はどこにいくんだろうか…」

その答えは、誰にもわからない。

その頃天使達は（後書き）

次はガルナハンです。

えインド洋？

作者の脳内で削除しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8946u/

僕と俺のツインマニューバー

2011年10月11日09時57分発行